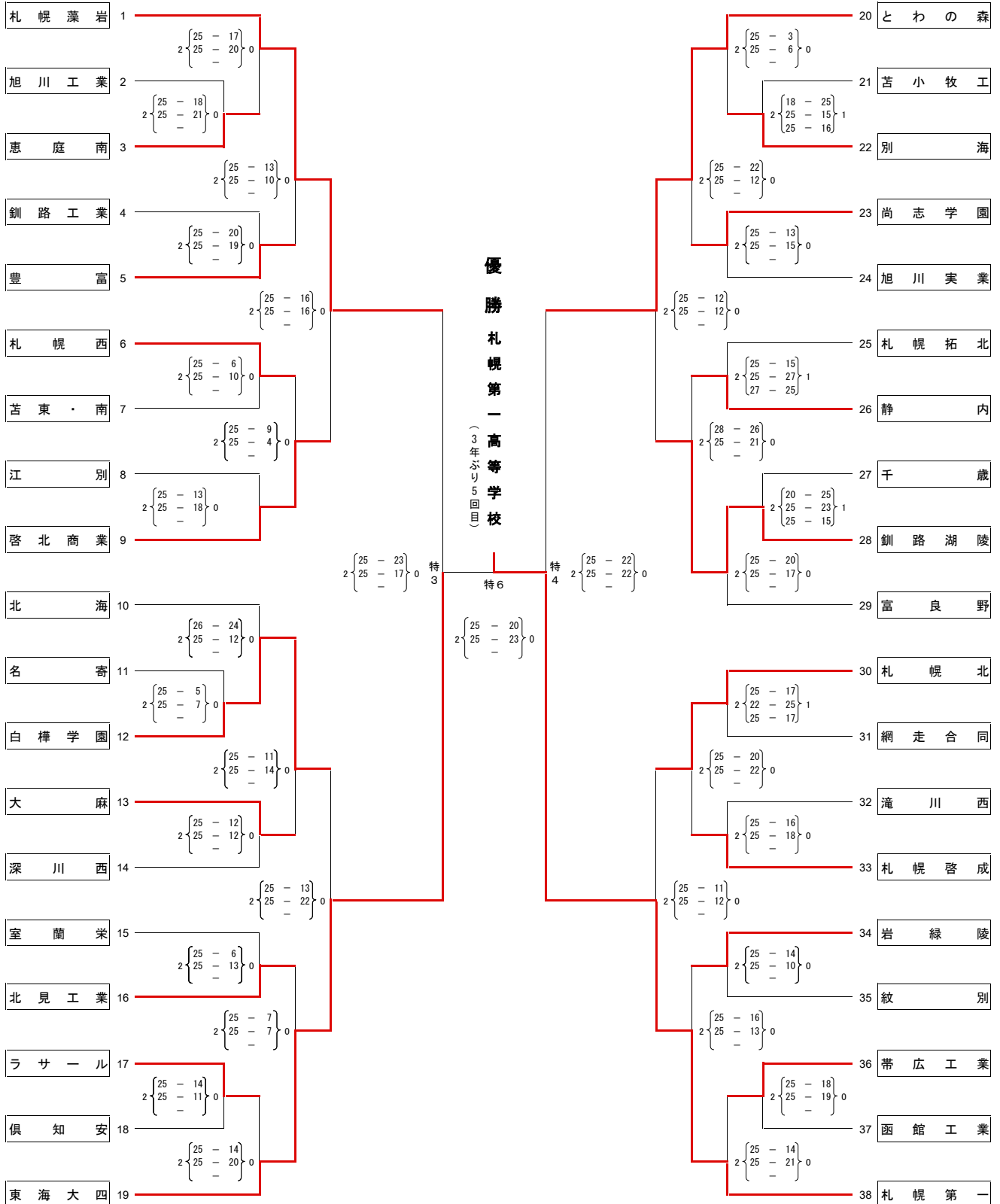


大会名 第64回全日本バレーボール高等学校選手権大会 北海道代表決定戦

日時 平成23年11月3日(木)～6日(日)
会場 北海道立総合体育館センター

大会委員長 大 江 憲 一
競技委員長 大 杉 木 憲 一
審判委員長 鈴 木 和 彦
総務委員長 山 上 章 治

【 男子 】



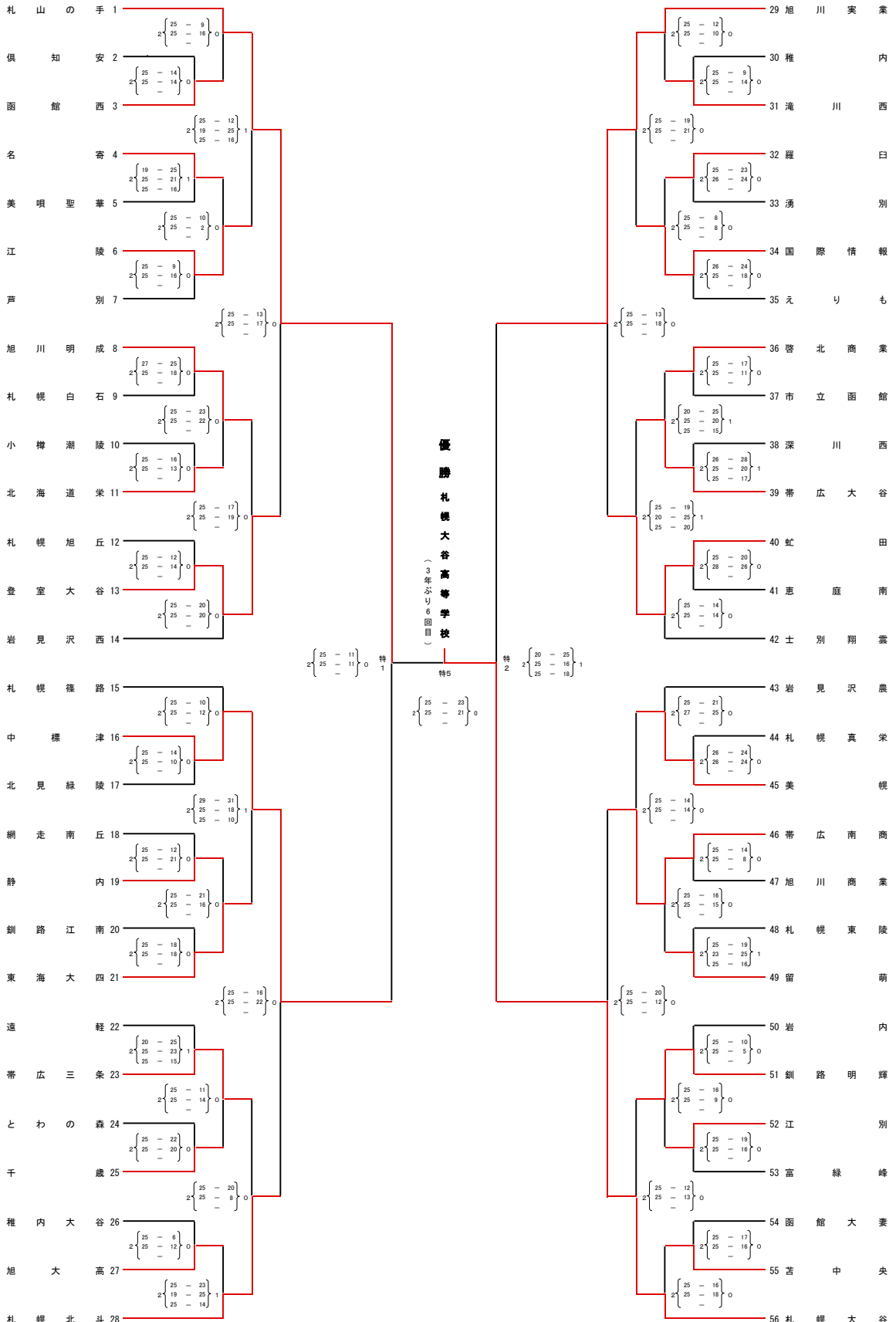
【戦評】

準決勝第1試合 札幌藻岩 vs 東海大四
1 セット目、両校ともに固さが見られる立ち上がりであったが、終盤まで一進一退の攻防が続く。だが、中盤での東海大四4番山田の2連続サービスエースをはじめ、後半以降東海大四1番二川のクロススパイクが決まりだし、東海大四が25-23で接戦をものにす。2セット目、序盤より東海大四1番二川のスパイクを中心に6番山下のスパイクも要所で決まり、これに札幌藻岩もエース1番森元12番榎本を中心にスパイク、ブロックで応戦するも最後は力尽き、25-17で東海大四の決勝進出が決まる。なお、東海大四は2年連続39回目の全国大会出場である。(高田幸太郎)

準決勝第2試合 札幌第一 vs とわの森
1 セット目、序盤から一進一退の白熱した試合展開が続く、18-18となる。終盤、流れをつかんだのは札幌第一だった。とわの森も追い上げるもミスが目立ち、25-22でセット終了。2セット目、序盤は前のセットの流れから札幌第一がわずかにリードするもとわの森が6-6に追いつく。そこから札幌第一は1番浅川、4番堤rの攻撃が決まり、9-16まで得点差を広げるが、その後ミスが続く、そのまま2点差で詰め寄られてしまう。しかし、そこから調子を取り戻し、22-25でセットを決め、勝利を手にし、全国大会行きを決定させた。なお、札幌第一は2年ぶり19回目の全国大会出場である。(岡祐生)

決勝 札幌第一 vs 東海大四
1 セット目の序盤は札幌第一のエース堤と東海大四のエース二川との打ち合いで、一進一退が続いた。また、札幌第一はキャプテン浅川のバックアタック、東海大四も山田のバックアタック等が決まり、息詰まる試合展開となった。20-20から札幌第一の堤のスパイクが決まった後は一気に押し切り1セット目を奪った。2セット目も20-20まで互角の戦いとなったが終盤は東海大四のスパイクミスがあり、その後粘りを見て23-23まで追いついたが、札幌第一8番山本のAクイックが決まりマッチポイントの後、エース堤がレフトからスパイクを決め優勝した。なお、札幌第一は3年ぶり5回目の優勝である。(川島信彰)

【女子】



【戦評】
準決勝第1試合 札幌山の手 vs 中標津
1セット目序盤、山の手フロック、6番小山の平行、時間帯攻撃が返え遅り、6対2とリードで中標津1回目のタイムアウト。中標津、中標津の粘り強いレシーブから6番合田のライトからのストレートスパイクで反撃するが、終始山の手がリードする展開で25対11でセットをものにす。2セット目、中標津は1セット目の完全な取返、悪化レシーブから2番香、8番伊藤の相手ブロックを利用した鋭いスパイクで攻撃を繰り返す。しかし、なかなか流れがつかぬまま、山の手の手返、高さあるブロックで15対9と更に相手を引寄せ、中標津もレシーブで取るが、山の手ブロックにつかぬまま、25対11で山の手が勝利を決め、決勝進出を決めた。なお、山の手は2年ぶり4回目の全国大会出場である。(大野俊文)

準決勝第2試合 札幌大谷 vs 旭川実業
第1セット序盤、札幌大谷は7番小宮のスパイクを中心にリードをするが、旭川実業がリベロ渋谷のレシーブから攻撃の流れを作り、逆転試合の主導権を握る。札幌大谷もキャプテン松田の速攻などで追い上げるが、旭川実業は途中交代した8番黒川の3連続ポイントもあり勝利する。第2セットは旭川実業河野と札幌大谷小宮の周エースによる打ち合いとなったが、札幌大谷6番加納のブロックが決まり点差を広げていく。あさひかわじつじょうは、選手交代を試みるが札幌大谷の決定力が勝りこのセットをものにす。第3セットに入ったも札幌大谷の勢いはそのまま、終始リードを保つ展開となる。旭川実業の粘りを振り切り決勝進出を決めた。なお、札幌大谷は7年連続10回目の全国大会出場である。(大野俊文)

決勝 札幌山の手 vs 札幌大谷
札幌の攻撃チームを合わせた決勝戦、第1セット目札幌大谷キャプテン松田の速攻で得点すると、札幌山の手は7-6番小山の鋭いスパイクで態勢を整えた。序盤は山の手ブロック、サーブエースで点差をリードするも15-15、17-17と物別れは続いた。そして中盤から、札幌大谷松田の速攻で抜け出す3番黒川スパイクが山の手ブロックを破り23-20、その後山の手が食いつく25-23、札幌大谷が早くも第1セットを終了した。2セット目立ち上がりから札幌大谷の加納のスパイク、ブロックが炸裂し、4-2とリード、山の手が1回目のタイムアウトを取る。追いつける山の手は8番黒川のサーブエースなどが決まりつづ、札幌大谷は7番小宮のスパイクで追いつく。中盤山の手は一息の意欲が燃え、目のせいで難關、山の平倉や内山が鋭いスパイクを打ち出す。19-15とリードするが、地方に響く札幌大谷の2番伊藤などがスパイクを決め、たちまち逆転して逆転し、21-19、22-20と先行、最後は山のスパイクで25-21と札幌大谷がリードを切り切った。札幌大谷は監督監督が返り現る、攻撃の全面開放で勝ち取った。なお、札幌大谷は、4年ぶり10回目の優勝である。(北川博)